

人模様

フランス人監督 核を追う マルク・プティジャン監督

毎日新聞 2016年3月26日 東京夕刊



マルク・プティジャン監督と肥田舜太郎さん

「一人の日本人医師の存在が私と核の問題を結びつけた」と話すのは、パリ在住のマルク・プティジャン監督（64）＝写真左。広島で被爆した医師、肥田舜太郎さん（99）らを追った映画「ヒロシマ、そしてフクシマ」が今月、東京・渋谷のユーロスペースで公開された。

パリの古書店で見つけた肥田さんの著書「広島が消えた日」（仏版）に心を打たれ「この医師の映画を撮ろう」と2005年に初来日。

「内部被ばく」の危険性などを熱心に指摘する姿をとらえて翌年、第1弾の「核の傷」を完成

させた。今作は東日本大震災当時、友禅作家の撮影で京都にいた監督が再び核の問題に向き合った。原発事故の被災者に心を寄せる肥田さんの胸中に肉薄し、日本の脱原発や被爆者運動の現在も収録した。

今は埼玉県内の施設にいる肥田さんを訪ねた監督は「平和な世界を希求する先生の生き方に影響を受けた」と言い、肥田さんは「被爆者医療に携わったことが私を本当の医者にした」と語った。【明珍美紀】